

ハロセンニエミ

画家ペッカ・ハロネンのアトリエ住宅美術館

画家ペッカ・ハロネンは、1865年、サヴォ地方のラピンラハティに生まれました。妻のマイヤは、現在はロシア領であるカレリア地方の町ソルタヴァラ近郊のミュツリユキュラ出身でした。結婚後、ハロネン夫妻は、カレリア、サヴォ、ヘルシンキとさまざまな地で暮らしました。そして作家ユハニ・アホに誘われて、一家がトゥースラに移り住んだのは、1898年のことでした。



20世紀初頭、トゥースラのランタ通り沿いには、多くの著名な芸術家、作家、学者、たとえば詩人J・H・エルッコ、画家エーロ・ヤルネフェルト、作曲家ジャン・シベリウス、作家エイノ・レイノ、ノーベル賞作家F・E・シッランパー、文芸評論家ヴィルヨ・タルキアイネン、言語学者E・N・セタラが住んでいました。

ハロネン家は、トゥースラのトゥオマーラ村に農家を借りて最初の居を構えました。ペッカ・ハロネンは冬の間、トゥースラ湖周辺をスキーやスケッチをしてまわり、自分のための「小屋」とジャガイモ畑に適した場所を見つけました。そして土地購入の後、1900～02年、細長い岬の岩盤の上に建物が建てられました。ハロネンは弟アンツティ・ハロネンと一緒に、このハロセンニエミを設計しています。建設には、主に故郷ラピンラハティのハロネンの親族が携わりました。この頃すでに「自然の中のコテージ」は、彫刻家エーミル・ヴィークストロムによってサークスマキに(1893～94年)、そして画家アクセリ・ガッレン＝カッレラによってルオヴェシに(1894～95年)建設されていました。ハロセンニエミは、それらと同じように、近隣住民と程よい距離を保ちながら湖畔に建てられ、アトリエは建物と同じ高さの2層分の天井高が取られました。建材の赤松は、フィンランド中部のコンギンカンガスから調達されていますが、ハロネンは、木材の強度が最大になる真冬に伐採されることに拘りました。土台の石は、隣接する「丘」＝ハロネン家の言葉を借りれば「山」＝から切り出されています。ハロネンは可能な限り建設に関わり、生活のための仕事、つまり絵を描くことはその合間にこなしました。また建物のディテールに細心の注意を配り、特にストーブと暖炉については、タイルの釉薬に至るまで自身でデザインするほどでした。精巧なストーブの扉は、従弟アルトゥ・ハロネンによるデザインです。これらのモチーフは、それぞれの部屋の用途や雰囲気に合わせて選ばれています。アトリエには、この建物の暖かい居心地のよさを象徴するように「暖を取る裸の女性」が配られています。ダイニングルームの「母豚と7匹の子豚」は、部屋の特徴をユーモラスに表わしています。また2階のアンニの部屋と1階の玄関にあるストーブの扉も必見です。

ハロセンニエミには、キッチン他に7つの部屋があります。その中核となるのが、2階まで吹き抜けている、多作な画家の仕事場のアトリエで、家族、そしてトゥースラの芸術家たち皆が集うリビングルームでもありました。音楽、文学、そして芸術や人生や日々の政治について語らうことは、ハロセンニエミの生活に欠かせないものでした。マイヤ・ハロネンは、仕事に勤しむ夫のためによくピアノでBGMを奏で、時にはアイノ・シベリウスと連弾することもありました。当時すばらしいバイオリン奏者の一人だった弟ヘイッキ・ハロネンが訪れると、熱烈なファンのためにホームコンサートが開かれました。

ハロネン家の人々は本をたくさん読み、ペッカ・ハロネンは読書に没頭する家族を多く描いています。マイヤ・ハロネンは、北欧文学のほか、イタリア文学もフィンランド語に翻訳し、たとえば、コッローディ作の「ピノッキオ」を1906年に訳しています。

Halosenniemi
Täiteilija Pekka Halosen ateljeekotimuseo

Halosenniementie 4-6, Tuusula Tel. +358 40 314 3466 halosenniemi@tuusula.fi www.halosenniemi.fi

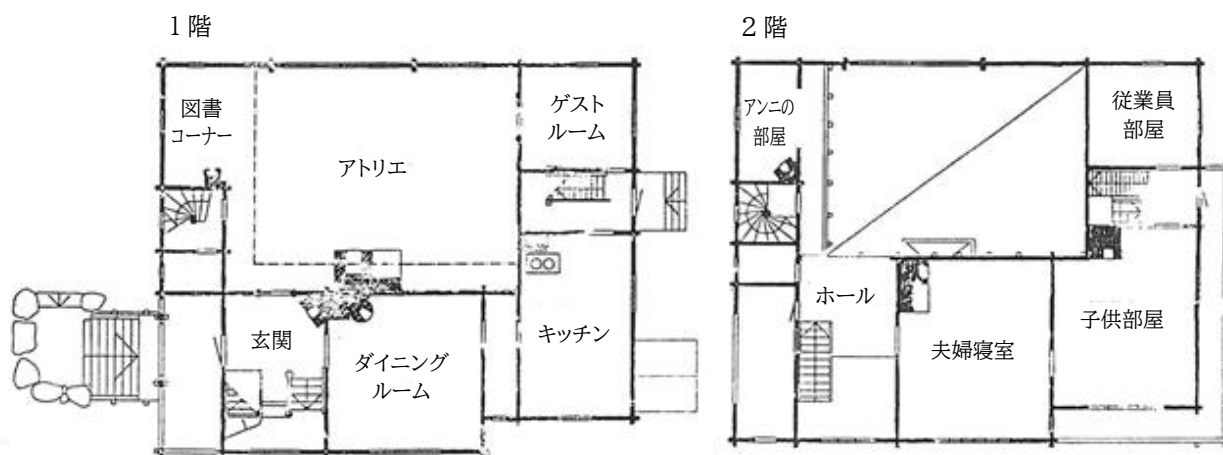
居室はアトリエを三方から囲むように配されています。これによって、大空間のアトリエを暖かく保つことができました。1階には、アトリエとその一角にある図書コーナーの他、ゲストルームとして使われていた部屋、キッチン、ダイニングルームがあります。ゲストルームは、ハロネン家が住んでいた当時は、アトリエからのみ出入りができました。一家が使用していたキッチンの調理用薪ストーブは、1950年代に撤去され、その痕跡が壁や床に残っています。同様にダイニングルームのストーブも撤去されましたが、これは1980年代末に、保存されていた記録をもとに復元されました。緑がかったタイルの半分ほどは、オリジナルのものが使われています。キッチンとダイニングルームをつなぐ小部屋は食品庫で、ハッチによって地下貯蔵庫へ降りることができました。

図書コーナーの上部のロフト部分に、長女アンニの部屋があります。年を追うにつれて家族が増え、子供は全部でウルヨ、アンニ、エルッキ、アンツェイ、マルヤ、エリナ、サカリ、カイヤの8人になりました。子供部屋は夫婦の寝室の奥にありますが、男の子たちは、玄関上部のホールで眠ることもありました。多い時には、家政婦や家庭教師もハロセンニエミで暮らしていました。2階の一番奥の部屋は、これらの人たちの部屋として使われました。

子供たちが遊んでいるようすは、父の絵の格好のモデルになり、「指の練習」として最適でした。ペッカ・ハロネンは、芸術家としても岬の生活に馴染み、絵の題材を家やその周りから見つけました。中でも春と冬の風景は、彼にとってかけがいのないものでした。春の訪れ、目覚めた自然がみせるさまざまな表情、そして雪を被った木々や凍った湖の変化する冬の形相に、いつも刺激を受けていました。自然を愛したハロネンに敬意を表して、1966年、ハロセンニエミは自然保護地区に指定されています。

ハロネン夫妻は亡くなるまで、この岬で暮らしました。ペッカ・ハロネンは1933年に68歳で亡くなりますが、マイヤ・ハロネンは、夫の死後も11年間、ハロセンニエミに住み続けました。二人は、トゥースラの古い教会墓地、従弟エーミル・ハロネンが制作した墓石の下に埋葬されています。ハロセンニエミは、1949年、トゥースラによって美術館として買い上げられました。

ハロセンニエミ 平面図



Halosenniemi

Taiteilija Pekka Halosen ateljeekotimuseo

Halosenniementie 4-6, Tuusula Tel. +358 40 314 3466 halosenniemi@tuusula.fi www.halosenniemi.fi